法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

〈書評と紹介〉村上直著　『論集 代官頭大久保長安の研究』

西沢, 淳男 / NISHIZAWA, Atsuo

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
81
(開始ページ / Start Page)
58
(終了ページ / End Page)
62
(発行年 / Year)
2014-03-24

Hosei University Repository

〈書評と紹介〉

村上　直　著

『論集　代官頭大久保長安の研究』

西沢　淳男

一

二〇一三年四月大久保長安所縁の東京都八王子市で没後四〇〇年の記念シンポジウムが開催された。これは、八王子で〇九年に本学名誉教授村上直氏を顧問とし設立された「長安研究会」が、石見銀山、甲府、小田原などの地域との情報交換を通し、市民によるまちの活性化への寄与を確信して、長安研究に特化し一一年発足した「大久保長安の会」が主となり開催したものである。

同会が、今後の大久保長安研究を深化させていくために、トータル的に村上氏の論考から学んでいく必要があると、本学教授馬場憲一氏に編集を依頼し、村上直氏が一九六〇年から二〇〇一年まで著した大久保長安に関する論考二十八編より十五編をセレクトし収録したものである。各論文は節とはせず、原著論文を尊重し、それらに手を加えることはせずに掲載することを基本方針として、初出時の論文名で独立しているが、次の目次で示すように、内容により五つのカテゴリーで括っている。

目次

Ⅰ　大久保長安の出自と甲斐
武田蔵前衆について
大久保石見守長安と猿楽衆
大久保石見守長安と甲斐
関東と甲斐国の連帯性―大久保長安の支配領域に関連して―
Ⅱ　大久保長安の在地支配と初期幕政
後北条氏から徳川氏へ―多摩地域を中心として―
初期関東における代官陣屋について
江戸時代初期の代官―特に伊奈・大久保・彦坂を中心に―
幕府創業期における奉行衆―大久保石見守長安を中心に―
初期幕府政治の動向―大久保石見守長安事件を中心に―
Ⅲ　大久保長安と石見銀山の支配
初期における石見銀山の支配―大久保石見守長安を中心に―
近世初期石見銀山の支配と経営―大久保石見守長安時代を中心に―
Ⅳ　大久保長安と佐渡鉱山の支配
近世初期鉱山の支配について―特に大久保石見守長安を中心に―
近世初期佐渡鉱山の支配形態
Ⅴ　大久保長安の実績と人物考
大久保石見守長安の研究覚書
幕府権力と大久保長安

Hosei University Repository

二

次に、各論文の概要について紹介していくが、凡例でも断っているように論考に重複がみられるので、各論文の主たる部分についてのものとする。

「武田蔵前衆について」では、甲斐武田氏の直属家臣団である蔵前衆（いわゆる代官衆）に着目したものである。その中に大久保十兵衛（長安）がおり、徳川家康の五ヵ国領有時代に抜擢をうけ、伊奈忠次を補佐し、慶長六年（一六〇一）の徳川再領時代に武田遺臣を登用していく中で、長安は国奉行となり、地方支配は蔵前衆の系譜を持つ地方巧者を直系代官として統率・整備していくところから、その動向を注視すべきであるとする。

「大久保石見守長安と猿楽衆」では、武田家猿楽衆大蔵大夫の次男とされる長安の出自の諸説を整理し、大和猿楽との関係から大和国出身と記す史書の多さに着目し、猿楽側関係史料から検討を加え、長安の士分取立後も養子氏紀を通じ猿楽衆と濃厚な関係が維持されていたとする。

「大久保石見守長安と甲斐」では、武田遺臣である長安の甲斐国における施策と動向をみた上で、長安死後の誅断過程を示し、陰謀説は見いだせないとし、地方史料の発掘の中から正しい歴史評価をしていくべきとする。

「関東と甲斐国の連帯性」では、地理的に称えられる関東、甲信越という言葉の持つ強い関連性を、歴史的に解き明かす必要性を説いた。関東と甲斐の国境にある横山（八王子）を地域拠点とする政治的構想は長安によるとする。家康の関東入国後の甲斐は、豊臣系の有力大名の拠点となっており、国境の軍事的緊張から武田旧臣を主体とする小人頭と同心（八王子千人同心の原型）、長安及び配下の代官衆の陣屋設置、町立の整備が行われた。関ヶ原後は、徳川氏の甲斐再領により、関東と甲斐との一体化した一円支配、さらに信濃・越後との連帯性の強化をはかるため、甲州道中の整備とそれを補完する多くの脇往還等が設けられたとする。

「後北条氏から徳川氏へ」では、全国からみた関東、関東における南関東、南関東における多摩地域といった地域的特質を、後北条時代から家康の関東入国後にいたる移行期を中心に歴史的に考察している。後北条時代の滝山・八王子城における在地支配を基本的に継承し、代官頭大久保長安の小門陣屋（八王子）を拠点としながらも、多摩川上流三田谷・柚保地域には青梅・森下陣屋や高麗本郷陣屋の設定により、在地性の強い山之根地方の掌握を試み、慶長検地を契機に新たな「領」の地域支配秩序を分割再編成し、近世的支配体制を確立していったとする。

「初期関東における代官陣屋について」では、徳川家康の関東入国後の在地支配の拠点であった代官頭及び配下の代官達の陣屋を、『新編武蔵風土記稿』『新編相模風土記稿』といった地誌類から丹念に拾い出し、その成立や廃止について実態を考察したもので、初期においては軍事的な側面も強く持ちながら、生産力の拡充と地域的市場の掌握を企図して設定されていったが、幕政上の代官の吏僚化志向や軍事的配慮の必要性が除去されるに従い、陣屋支配の廃止が促進され、年貢請負人的代官の失脚や元禄の総検地や地方直し実施の過

Hosei University Repository

程で廃止され、年貢地へ払い下げられたとする。

「江戸時代初期の代官」では、長安と伊奈忠次・彦坂元正の三人の代官頭による関東領国支配形態を概観し、初期代官は恣意的支配をある程度容認されていたが、農民の不満が発生した場合は、代官の犠牲により事態収拾が図られるなど身分的には不安定で、伊奈氏を除いた代官頭をはじめ、その他の代官・手代も寛文から元禄期までに不正・私曲あるいは農民の直訴による絶家も少なくなく、幕府成立過程で礎を築いた代官・手代の系統の多くは、支配体制の確立とともに姿を消したとする。

「幕府創業期における奉行衆」では、在方支配を担った代官頭としての大久保長安ではなく、幕政初期の職制確立以前の多様な奉行衆の特徴を明らかにした上で、その一人としての長安の性格や幕閣における位置をみたもので、奉行として地頭・代官の恣意を抑圧する立場にありながら、大久保忠隣・本多正信の長安に対する絶対的優位がみられるものの、武功派の地方巧者への軽視のなかにあって、例外的に長安については代官頭としても奉行としても重要な位置をしめ、二面性は幕初においてこそ許容されたものであるとする。

「初期幕府政治の動向」では、長安死後、一族をはじめ幕閣・諸侯が連座し失脚する、いわゆる大久保長安事件について、誅罰要因の諸説を整理した上で、初期の幕府政治動向や姻戚関係から、三河譜代の伊奈忠次が支配地を関東を中心に幕閣中枢との姻戚関係が強かったのに対し、長安の支配地は全国に及び、豊臣系の外様大名との姻戚関係が強く、慶長年間、豊臣政権の幕閣内部への浸透を排除する大きな役割を果たし、代官頭の職権拡大を阻止し、在地支配体制の転換を果たした事件であったとする。

「初期における石見銀山の支配」では、長安支配による銀山開発活況は、技術巧者として石見国出身者（毛利時代の役人も含む）を中核としながらも武蔵・相模・駿河国や甲斐からも武田蔵前衆と密接に関わる鉱山開発を担当する金山衆とみられる者を地役人として採用し、長安の直接指示のもとにおこなわれ、長安により抜擢された山師の安原備中因繁の技術によるところが大きく、石見守叙任はこの功績とし、石見における採鉱技術と経営の発展が、長安や銀山役人を触媒とし佐渡や伊豆の直轄鉱山の活況を招くことになったとする。また、長安について、江戸後期の大森では鉱山の盛衰に関連してその手腕を再評価し、盛況を祈願する動きがあったとする。

「近世初期石見銀山の支配と経営」では、毛利氏時代の銀山奉行佐世石見守配下であった今井越中守・宗岡弥右衛門・吉岡隼人・（石田喜右衛門）により支配実務は踏襲され、石見の所領二万石は、直系の代官や役人によりある程度組織と職務分掌により運営され、戦国期以来の古い代官請負制が克服されずに、そのまま踏襲されていたという。

「近世初期佐渡鉱山の支配について」では、慶長六年よりはじまる長安配下の代官とみられる田中清六以下の四奉行制から、同八年農民の江戸出訴による四奉行制の消滅と長安直支配の過程を論じ、領主権力の在地掌握を直接的企図であったとする。また、家康六男松平忠輝の越後福島（高田）への移封は、信濃川中島（松代）時代よりの家老であった長安による佐渡と越後の統一支配、さらには川中島を通過する北国街道を掌握することにより、金の江戸輸送も含め

Hosei University Repository

た統一的把握を確立したとする。

「近世初期佐渡鉱山の支配形態」では、長安による佐渡直支配後に鶴子から相川に陣屋を移し、目代大久保山城や石見大森から宗岡佐渡、武田蔵前衆であった小宮山民部を派遣し開始され、自らも渡海し、さらに直系の代官・地役人を配置することにより一国把握を促進したとする。長安の佐渡鉱山経営は、運上入札制から直山制に切り替えるとともに、大森や伊豆の採掘と競合させることにより活況をもたらそうとしたこと等、田中清六・小宮山民部・宗岡佐渡・吉岡出雲といった配下の動向から、彼らが果たした役割が重要であったとする。

「大久保石見守長安の研究覚書」では、一九六七年段階での研究史における長安に関する出自・叙任・陰謀説・陣屋地（屋敷地）・石見検地等基礎事項に関する諸説の整理と確定をしている。

「幕府権力と大久保長安」では、発表した「大久保石見守長安の研究覚書」について『史学雑誌』の「回顧と展望」において指摘された点に関して、一次史料だけでなく各地に散在する遺跡や金石文等も、こうした遺跡の持つ意味や再評価の動きも幕府権力との関係を考える上で注目すべきものであると、反論する。

三

ここで本書全体について、いくつかコメントをしておきたい。

本書の利用においては注意が必要である。論文の合冊集であるとしてみれば、研究史の集約として利用し易いが、単著の表題から統一された内容を期待してしまうと拍子抜け感がある。それは、編集方針として断ってはあるが、論述及び引用史料に相当数の重複がみられるからである。掲載論文も、註の付された学術雑誌に掲載されたものからそうでないものまでが混在しており、統一感に欠け、無理に記念事業に合わせるのではなく、編者による交通整理や採用された論文の研究史上の位置付け意義についての補足は必要であったのでないかと思う。

例えば、長安が武田蔵前衆であった点やそれに関連することについては、史料上の制約から共通して『甲斐国志』や『甲陽軍鑑』・『朝野旧聞裒藁』等々の二次史料による記述が中心になる。他のカテゴリーでも同様である。ピンポイントに論文を読む場合にはよいが、通読する場合には繰り返し同一史料や記述を読むことになってしまう。

同様に佐渡鉱山支配について、最初の論考で田中清六らの四奉行体制から長安の直接支配へ代わることが指摘され、次の論考では田中清六らの四代官制と記述され、他の論考にも四代官と四奉行が混在し、通読すると混乱してしまうのである。

また、総説的に「長安の研究覚書」が本書の最初に配されていた方が、その後の各論文を読む際に理解を助けたのではないかと思う。

一方、本書の特徴として原則原著論文に収録されていた当時の遺跡・遺物の写真を掲載し各論考の補足となっている点である。こうした伝説・遺跡に関しては、村上氏が別稿[1]で代官の顕彰碑や生祠の実態を考察し、本書の最後の論考でも論じられているが、近年盛んになってきた記念碑や村方旧記・地誌等の編纂物から地域社会における歴史意識を論ずる研究[2]や、大久保長安についての

Hosei University Repository

集合的記憶についての論考[3]にも、すべて通底しており、一次史料だけでなく伝説、二次史料や金石文、遺跡を利用しながら近世後期に長安を再評価していく地域社会におけるアイデンティティをみていこうとする先駆的な論考には、現在の最新の研究志向を先取りした先見がみられるのである。

このように、本書は一九六〇年代の論考が中心であるにもかかわらず、古さを感じさせず今なお大久保長安研究の金字塔であることに変わりない。近世初期に絶家してしまった長安については、個々の地域支配において一次史料の発見により施策が補強されることがあっても、根本的な長安に関する基礎事項は二次史料に依拠している限り大きく変容しないからである。とはいえ、本書では京都・伏見・奈良といった畿内や駿府・美濃での長安ついての論考がないため、語り尽くされているわけではない。

また、本書と併せて記念シンポジウムの記録集『大久保長安に迫る―徳川家康の天下を支えた総代官』（揺籃社、二〇一三年）を通読することにより、本書を踏まえた長安の新たな人物像と各地での事績を振り返ることができる。両書ともぜひ一読を薦めたい。

なお筆者の力量不足から、著者の真意とは乖離した紹介になってしまったかもしれないが、ご海容願いたい。

（二〇一三年四月刊　A5版　四三七頁　揺籃社　定価二八〇〇円＋税）

註

（1）村上直「江戸幕府代官の民政に関する一考察」（『徳川林政史研究所研究紀要』昭和四十五年度、一九七一年）。

（2）羽賀祥二『史蹟論』（名古屋大学出版会、一九九八年）、岩橋清美『近世日本の歴史意識と情報空間』（名著出版、二〇一〇年）。

（3）馬場憲一「多摩地域における代官頭大久保長安の事績と記憶」（『多摩のあゆみ』一五一号、二〇一三年）。

［付記］本編の校正中、村上直先生の訃報に接した。言葉が見つからないが、これまでの学恩に感謝し、先生の御冥福をお祈り申し上げる次第である。